老年世代の「私と子ども」関係イメージ

― 過去、現在、未来のビジュアル・ナラティヴ ―

やまだ　ようこ・村上　幸平

京都大学大学院教育学研究科紀要 第58号
2012

老年世代の「私と子ども」関係イメージ
－過去、現在、未来のビジュアル・ナラティヴ－

やまだ　ようこ・村上　幸平

Ⅰ　問題と目的

人は自分と他者との関係をどのように関係づけているか、人は自分の人生をどのようにイメージしているか、本研究ではこれらの問いを生涯発達心理学の立場から迫ってみたい。

心理学は、長らく「個人（individual）」や「自己（self）」を基本単位にしてきた。それに対して本研究では、「関係性」を単位とする新しい観点に立つ。つまり、人間を個人として文脈から独立した概念とみなすのではなく、関係性や文脈性を基にする文脈主義の立場に立つのである。人間をとらえるもっとも小さい基本単位も、個人や自己ではなく、人と人のあいだ、つまり「私とあなた」の関係性におく（濱口，1993；やまだ，1995；2006）。

やまだ（1988）は、人間関係の基本として「私とあなた」の二者関係をとりあげ、その代表として誰にとっても重要人物である「私と親」の関係に焦点をあてた。そして成人前期の若者世代（大学生）から見た「私と母」関係のイメージを、モデル生成的現場（フィールド）心理学の方法論（山田，1986；やまだ，2002．2008）を用いてネットワークモデルにした。このモデルは、日本だけではなく、英国、アメリカ、韓国など多文化の文脈で比較され、異なる文化文脈に共通するモデルとして一般化された（やまだ，1989-1990；山田1992，Yamada, 1991）。

本研究の目的は、第１に、多文化的比較から共通項をとりだし一般化したやまだのモデルを、時間的比較から、より一般化したモデルにすることである。本研究では、老年世代の人々が描く「私と子ども」関係のイメージに焦点をあてる。時間的ポジションを、「若者から老年」へと大きく移動し、視点ポジションを、子どもから見た「私と母関係」から親から見た「私と子ども関係」へと反対方向に移動することで、先行研究で構成したモデルがどこまで広く通用するかを調べるのである。第２の目的として、共通モデルをもとに、人生の大部分を終えた老年世代の関係イメージを、若者世代のイメージと比較する。

本研究は、ナラティヴ論の立場に立っていることも大きな特徴である。自己や自己の人生を、実体としての個人としてではなく、語りによって構成される「ナラティヴ・セルフ（物語的自己）」「ライフストーリー（人生物語）」とみなす、ナラティヴ・アプローチをとる（Bruner, 1990/1999; McAdams, 1993; White & Epson 1990/1992; やまだ，2000）。

本研究の第３の目的は、従来のナラティヴ研究の方法論に対して、ビジュアル・ナラティヴの方法論を用いて、イメージ画の事例と物語化の特徴を具体的に提示することにある。従来は、もっぱらインタビューなど言語による語りが用いられてきた。本研究では視覚的イメージを用いたビジュアル・ナラティヴによる物語化のしかたを検討する。

やまだ（1988, 1991）は、「私と母」の関係を「幼いとき（過去）」「現在」「未来」の時間系列を異にする３種類のイメージ画を描いてもらった。このイメージ描画法（Image Drawing Method, IDM）は、「この世とあの世の関係」「人生のイメージ地図」などの研究にも拡張できる（やまだ，2010ab; Yamada, 2011）。

イメージ描画法の特徴は次の６点にまとめられる（2010b）。（１）イメージ画を、何かの心理現象をみる手段としてではなく、それ自体を描画ナラティヴとして心理学データとする。イマジネーションの世界（想像世界）を実在しない空虚な世界とみるのではなく、心理的リアリティのある世界として扱う。（２）イメージ画を、描いた個人の特性を調べるために使うのではなく、人びとに共有されているフォークイメージとして扱う。イメージ描画は、従来の心理学の言語、論理、認知偏重から脱却でき、次のような長所をもつ。（３）因果的思考など、狭義の物語的思考から脱却できる。絵では、「個人と個人の関係」ではなく「関係性」そのものがまるごと表現できる。（４）素朴な直感やいきいきした生成的な表現ができる。（５）文化・歴史的文脈を超えて他者に伝達しやすく理解されやすい。（６）日本人が得意な表現形式であり、日本文化の伝統を生かせる。イメージ画を使用するビジュアル・ナラティヴ研究は、国際的にも注目されており、方法論的にも新しい領野を開拓できると考えられる。

親子関係の心理学研究では、従来はもっぱら個人差に関心が向けられてきた。愛着の類型化や親子関係診断検査など、問題のある親や家族関係を発見して援助することが目的だったからである（岡堂　1989など）。また、親子関係の良し悪しは、子どものパーソナリティや知能や不安特性などに影響するから、どのような親がどのような子どもの特性と関係するか、個人差の測定と他尺度との相関関係を見出す研究が多くなされてきた。

それら個人差研究や質問紙調査研究とは異なり、本研究の目的は、親子関係を通じた「人と人の関係性」や「物語化のしかた」のモデル化にある。親子関係の良し悪しを調べることが目的ではないから、価値フリーの立場に立つ。従来の研究は、「このような関係を描くのは、どのようなタイプの人か」という個人に収斂する問いを探究してきた。本研究では、「それは現実を正しく反映しているか」という実体論的問いや、「親の養育が子に与える影響」という因果論的問いから離れて、次のようなナラティヴ論的問いに答えようとする。「何が価値ある重要な人生物語として語られるか」「その人生物語にはどのような特徴があるのか」。本研究では、「人はどのような関係性と物語化によって親子関係を描くのか」を問い、親子関係のネットワークモデルのなかで典型性と多様性を示し、人間関係の基本パターンや人生物語の編み方を探究するのである。

以上、本研究の目的は、次のようにまとめられる。老年世代の「私と子ども」関係のイメージ画、ビジュアル・ナラティヴから次の２点を調べる。第１に、若者世代をもとに作成された「親子関係（人と人の二者関係）」の基本モデルを老年世代にも適用できるか調

べて、モデルを一般化し、さらに両世代のイメージを比較する。第２に老年世代の「過去－現在－未来」の時間軸にそった人生物語の特徴を明確にする。

Ⅱ　方　　法

Ⅱ－１　調査協力者

老年期にあたる60歳以上の男女を調査協力者とした。生涯学習セミナーを企画している団体や地域のクラブ団体などに調査協力を依頼し、合計で約250人に質問紙を配布した。有効な回答を得られた70人（男36人、女34人）を、今回の分析対象にした。

調査協力者の平均年齢は、70.9歳（男70.2歳、女71.6歳）であった。年齢分布にすると、60代26人、70代29人、80代以上９人であった。子どもの平均人数は、2.2人（男1.7人、女2.8人）であった。子どもの人数の分布は、１人（10人）、２人（41人）、３人（17人）、４人以上（２人）であった。

親子関係の研究では、母子関係、あるいは父子関係のように役割によって別々に調査されることが多かったが、本研究では、親の性別よりも「関係性」そのものに焦点をあてるため、男女をほぼ均等にした。

Ⅱ-２　調査方法

「イメージ画調査」と題した質問紙調査を無記名で行った。Ａ４版５枚からなる質問紙のフェイスシートには、研究趣旨や背景情報収集に関する次のような内容を記載した。また、最終頁には、学術的公開の許諾を得る欄や自由記述欄をつくった。

私は京都大学で「親と子どもとの関係性」ということについて研究をしております。このようなイメージ画調査によって、親が自分の息子や娘との関係をどのように認識しているのかを検討することを研究のテーマとしています。

本調査では言葉よりも絵のほうを分析の対象とします。問いかけられたことについて、思い浮かんだことをあまり深く考えずに気楽に描いてください。その際、絵の上手下手は問いませんので、そういった点はあまり気になさらないでいただいて構いません。絵は、別の何かにたとえたものでも、どのようなものでも結構ですのでご自由に書いてください。なお、調査用紙は全部で５ページあります。

また、本調査は描かれた方の性格や描画の能力を見るためのものでなく、一人ひとりの回答内容を分析の対象とすることはいたしません。調査は無記名で行い、全体の結果について考察するため、お答えいただくあなた個人にご迷惑をおかけすることはございません。また、調査によって得られた結果や個人情報につきましては、本研究以外の目的で用いることはございません。

・調査年月日　　年　　月　　日
・あなたの年齢　　歳
・あなたの性別（どちらかに○を）　1．男　　2．女
・あなたのお子さんの人数　　人
・あなたのお子さんのきょうだい構成・年齢（例；長男…30歳、長女…28歳、次男…25歳）
（　　）
・お子さんは結婚していますか？（誰が結婚していますか）
1．結婚している（誰が；　　）　2．結婚していない
・現在、お子さんと同居していますか？（誰と同居していますか）
1．同居している（誰と；　　）　2．同居していない
・「2．同居していない」を選択された方は、お子さんとどのくらいの間隔で会いますか?
（例；週に1回程度、など）　（　　）
・あなたの今の健康状態について、何か心配なことはありますか？
1．非常に心配なことがある　2．少し心配なことがある
3．特に心配なことはない
・ここ10年の間に、大きな病気をされたことはありますか？　1．ある　2．ない

イメージ画は、次の説明を各用紙に記し、1人につき3枚の絵を白紙に自由に鉛筆で描いてもらった。

1．あなたのお子さんが幼いときの、あなたとお子さんとの関係をイメージして、絵に描いてください。また、その絵についての説明も付け加えてください。
2．現在のお子さんとの関係をイメージして、絵に描いてください。(以下同文)
3．未来のお子さんとの関係をイメージして、絵に描いてください。(以下同文)

先行研究で、イメージ画の問い方は、たとえば「お子さんが小学生のとき」のように具体的な時期を指定して統一するよりも、このような漠然としたもののほうが、望ましいとわかったので採用した。なぜならば、日常の現実的な姿や、いつ何が実際に起こったかを歴史的に詳細に知ることが本研究の目的ではないからである。あくまで「関係性」そのものの表象的なイメージと、過去、現在、未来の時間軸にそった物語化のしかたを知りたいからである。

調査用紙の配布および回収の方法については、以下のようである。まず、あらかじめ各団体の代表者に、電話で本研究の趣旨と調査への協力を依頼する旨を伝え、同意が得られた上で、後日、研究計画書・調査協力依頼状・質問紙の見本を提示し、本研究の趣旨や意義について詳細に説明し、改めて協力を依頼した。クラブ団体の活動およびセミナーは毎週決まった曜日および時間に定期的に行われている。そのため、配布及び回収は、活動の場に一度伺い、協力者の方々に質問紙を配布しその趣旨を説明し、その場では持って帰って回答してもらい、次週の活動時間に再訪し、質問紙の回収を行うという方法をとった。

質問紙配布のときの説明では、性格検査や心理検査とは違うこと、老年世代の人々のあ

りのままの親子関係のイメージを知りたい調査であるから、正しい解答や誤った解答というものはなく、何を描いても自由であること、ありのままの姿から研究者が学びたいという趣旨を述べた。また、プライバシーや個人情報に配慮し、個人を特定しないために、匿名で調査を行うことを説明した。絵を描くことへの抵抗感をもつ方が多いと予測されたため、どのような絵でも自由で、簡単な絵で構わないこと、絵の上手下手は問わないことを強調した。

Ⅲ　結果と考察

やまだ（1988; Yamada, 1991）をもとに、老年期のイメージ画を次の３つの観点から分析した。１）親子関係のネットワークモデル：「私と子ども」関係によるモデルの一般化と改良。若者世代（成人前期、大学生）の調査データとの比較。２）「私と子ども」関係の基本形の事例提示：基本形の定義、基本形の典型例とバリエーションの提示、若者世代との比較。３）時系列でみた物語化の構造とテーマの特徴：「過去－現在－未来」の時系列でみる物語化のしかた。

Ⅲ－１　親子関係のネットワークモデル

やまだ（1988）が作成した、若者世代の「私と母」関係のネットワークモデルが、老年世代の「私と子ども」関係のイメージ画にも、ほぼそのまま適用できることがわかった。そこで、より汎用性を高めるために図１のように改良した。ネットワークの核となる基本形の名前は、後述するように動詞一語の名前に変更し、定義を加え、図示のしかたも改良した。これは網目構造のモデルなので、基本形どうしの距離や位置や配置など、空間的な関係性は重要であるが、本来、順序性はもたない。しかし、引用の便を考えて、基本形に番号をつけた。

なお、ネットワークモデルは、網目によって「むすぶ」ことを基本操作とするので、カテゴリーによって分類するものではない。人為的に「分ける」ことを基本操作とするツリーモデルとは根本的に異なるタイプのモデルである（やまだ，2008）。基本形は、網目の「結び目」として、ほかの基本形との意味連関のむすびの核心に位置することを表している。

Ⅲ－２　親子関係の基本形の定義

親子関係の基本形は、ネットワークモデルのむすび目に位置する。表１のように９種類の基本形を定義した。基本形は、描画に示された関係性の構図をもとに定義される。言語による説明は補助的なものである。

基本形は、①包む（Wrapping）、②支える（Supporting）、③見守る（Looking after）、④並ぶ（Siding）、⑤向きあう（Facing ）、⑥離れる（Separating）、⑦導く（Leading）、⑧与える（Giving）、⑨打つ（Punishing）と動詞によって名づけた。

図１のネットワークモデルには、基本形どうしの関係性が示されている。大きく見れ

ば、「①包む、②支える、③見守る」は、子が主導的か中心にあり親が子を守る関係性であるから、〔保護（protecting)〕グループである。「④並ぶ、⑤向きあう、⑥離れる」は、親と子が比較的対等な位置にあるから、〔対等（equal)〕グループである。「⑦導く、⑧与える、⑨打つ」は、親が子よりも上位か前面に出て主導的に子に働きかける〔指導(guiding)〕グループである。

やまだ（1988）では、基本形の名前は、「つつむ母といれこの私」など「親と子」をセットにした。しかし、名前が長くなる欠点もある。そこで本研究では、関係性を端的に表すために、「包む」など動詞一語に変えた。親から見れば「包む」、子から見れば「包まれる」だが、能動態も受動態も両方を含み、双方の関係性を示す名前として「包む」という動詞にした。どちらが主体でも、基本形の動詞は、双方の関係性をあらわすものとする。

なお先にも述べたように、これらの基本形は、分類のためのカテゴリーではなく、相互背反的なものではない。基本形とは、ネットワークモデルの網目の結び目として典型的で核心的なパターンである。したがって、実際には、個々の絵は、二つ以上の基本形が重複した意味で描かれる場合も、それらのあいだの移行形や中間形として描かれる場合もある。

Ⅲ－３　親子関係の基本形の典型例とおもな事例

本調査で得られた、９種類の基本形の典型例を提示する。モデル生成的現場研究では、事例を半具象絵画的モデルと位置づけているので、典型事例と多様事例（バリエーション）の提示はきわめて重要である（やまだ，2002)。

①包む（Wrapping)

「包む」関係の典型例は、事例１「同心円」である（男024過去)。「包む親と入れ子の私」の関係、つまり親が子どもよりも大きく子どもを包みこみ、親の中に子どもがいる様子を抽象的に表したものである。このような同心円形は、若者の絵にも多く見られた。「包む」行為には、大切で庇護されるべきものを守るという働きがあるため、この構図では、包む者である「私」が大事な子どもを様々な事物から守ろうとしている。

同心円形のような抽象的図式だけではなく、多様な包み方が見られた。たとえば、「私」が着ている防寒服を広げその中に子どもを入れて包み込むことで寒さから守る絵（男034過去）や、自分を中心にして手を広げて丸い輪をつくる絵（女030未来）などがあった。また、布団に入っている子どもを布団の上から手を置いて包んだり、子どもと一緒にお風呂に入る絵（事例13-1参照）や、海に浮かべたボートの中で親の膝の中に子を入れている絵（男015過去）などもあった。布団や敷物や風呂や家、山や海や自然など、人間以外のもので「包む」行為があらわされるものも、「包む関係」の構図のバリエーションと考えられる。

②支える（Supporting)

「支える」関係の典型例は、事例２「背負う」絵である（女008過去)。掃除をしている

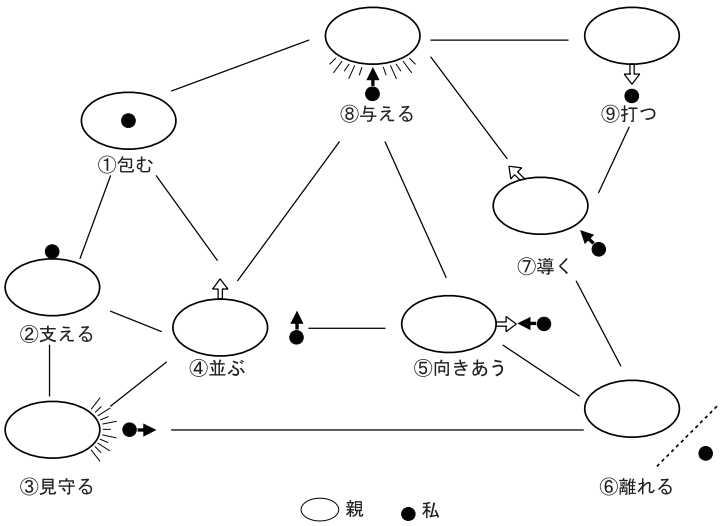


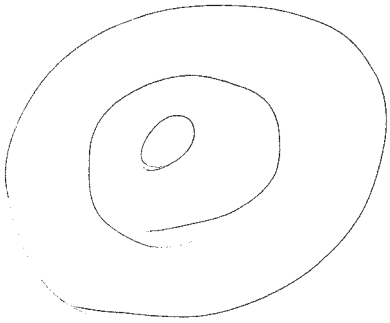
図１　親子関係のネットワークモデル

表１　イメージ画にみる「親子関係」の基本形：定義

①包む（Wrapping）：子が中心で、大きい親の身体や親の代理物（輪、ふとん、風呂、家など）に包まれる、中に入る形で描かれる。「入れ子の同心円」「腕で抱きかかえる」など。
②支える（Supporting）：子が主体で、親は子を背後や下から支持し、子が親の身体（背中、腕など）に依存する形で描かれる。「背中に背負う」「後ろから支持する」など。
③見守る（Looking after）：子が主体で、親は子の後ろや横の少し離れた位置から、直接の身体接触はしないで、子の行動を見る形で描かれる。「背後から見守る」「出て行く子を見送る」など。
④並ぶ（Siding）：親と子が並んだ位置で、共に同じ行動をする形で描かれる。「手をつないで並んで歩く」「並んで同じ作業をする」など。
⑤向きあう（Facing）：親と子が顔を向きあう位置で、相互に行動する形で描かれる。「向き合って話をする」「向き合って食事をする」など。
⑥離れる（Separating）：親と子が空間的に離れる、枠で分離される、背中あわせになるなどで、互いに隔たっている形で描かれる。「別々の空間にいる」「背中を向けて別々の行動をする」など。
⑦導く（Leading）：親が主導して先頭に立って進み、ガイドや手本を示してリードし、子は親の後ろをついて行く、従う形で描かれる。「子が親の後ろをついて歩く」「親が子に指図や指導をする」など。
⑧与える（Giving）：大きい親が小さい子を、大きく伸ばしたり、より良く育てるために、栄養や援助や利益や賞を与える、子から見ると何かを「くれる」形で描かれる。「太陽が植物に光をそそぐ」「ごほうびをくれる」など。
⑨打つ（Punishing）：大きい親が小さい子をたたく、撃つ、打ち負かす、力を誇示する、叱る、罰を与える形で描かれる。「親が子を上から威圧する」「親が子を打つ」など。

＊基本形は、絵の構図で決め、説明は補助的に使う。相互背反的カテゴリーではないから、重複や中間形もある。

＊＊大きく分けると、①②③は子が主導的で親が〔保護（protecting）〕、④⑤⑥は親子が〔対等（equal）〕、⑦⑧⑨は親が主導的で子を〔指導（guiding）〕グループになる。

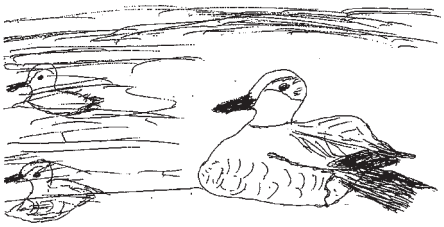


事例１　①「包む」典型例－同心円
（男，024，76歳，２人，過去）

仕事で忙しいのに、良く遊んでやったし、彼らもそれを喜んでいた。まるで小池の中の小鳥のようだ。

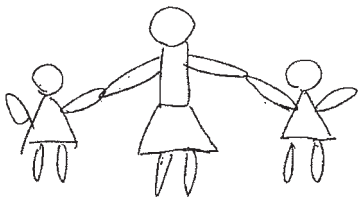
事例２　②「支える」典型例－背負う
（女，008，年齢不詳，3人，過去）

長男と次男は、３才位までは、大抵おんぶして家事や店番をしていました。長女は年がはなれているので、家の者がお守りしてくれました。幼稚園、小学校と成長してからは、三人共、手がかからない子供でよく手伝ってくれました。



事例３　③「見守る」典型例－後ろから見守る
（女，018，72歳，2人，過去）

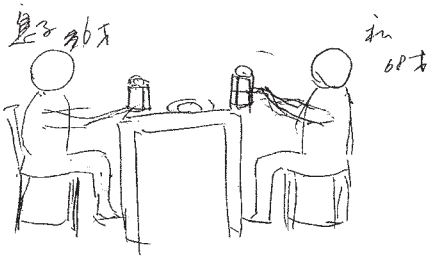
いつも一緒



事例４　④「並ぶ」典型例－並んで手をつなぐ
（女，010，63歳，2人，過去）

いつも３人一緒に、よく遊んでいました。

＊事例の表示（性別，個人番号，年齢，子どもの数，絵の種類）



事例５　⑤「向きあう」典型例
ー食卓で向きあって話す
（男，017，68歳，２人，現在）

息子は仕事に忙しく毎日22時前後の帰宅、私はリタイヤ後、週４日間のシルバー活動、週１日のスカイ大学、年２～３回は、家内とあるいは友人夫妻と旅行をしており、年令の割りに忙しく過ごしております。従って、休日の時は、息子と酒をのみ、政治、経済、スポーツ談義をするのを楽しみにしております。（息子36才、私68才）。＊娘の男児（孫）とは、息子の再来の思いで、息子とした様に遊んでいます。

事例６　⑥「離れる」典型例
ー離れて背を向け別の活動をする
（女，014，66歳，３人，現在）

子供は、それぞれ自立し、私は地域の人たちとボランティアやクラブ活動を楽しんでいる。

事例７　⑦「導く」典型例
ー前で主導する親の後につく子
（女，024，73歳，２人，過去）

孫悟空（テレビでサカイマサアキ）の衣装を縫ったり、忍者の黒しょうぞくを縫ったり、ジャイアンツの２段ぬいあげをして着たり、仕事のあいまに「飛行船」のながぐつをはいた猫、ジャックとまめの木、オズのまほう使いと、子供をだしによく遊びました。如意棒や頭のわ（？）も手作りです。

事例８　⑧「与える」典型例ーお金を与える
（男，027，65歳，2人，現在：一部略）

孫との触れ合いが現在の私と子供たちとの関係です。息子たちのそれぞれの孫が今一番可愛い幼少期のため、じぃーちゃんとばぁーちゃんは、今日は名古屋へ、明日は大阪へと孫の行事に出向かなければならず、嬉しい悲鳴をあげています。（かいじゅうのおもちゃ　買っておいで）

「私」がまだ赤ん坊である息子をおんぶする姿が描かれており、幼い子どもを親である「私」が保護して大切に育てている。事例10-1において、子どものパンダを背負う母パンダの絵も同様である。これらは「支える母ともたれる私」の関係であり、親は身体など直接的な形で子どもの成長を支え、子どもは親に依存している様子が表されている。

他には、親の身体にもたれる子を抱く（男032過去）、プールで泳ごうとする子を横抱きで支える（男005過去）、横にいる子を腕で支える（男034過去）など、「抱く」構図も多く見られた。「包む」関係では、親の身体の中に子をすっぽり包み込みあたたかく守る抱き方である。それに対して「支える」抱き方では、子どもの身体の大部分は親から出ており、親が子どもの身体の一部だけを前や横や後ろからサポートする形で抱くところが違っている。

また、下から支える絵としては、親の顔の上に２人の子を載せて下から支える（男022過去）や、祖母とともに上にいる子を、母である自分が一段低い位置でひざまずいて「下積み」で支える絵（女005過去）などがあった。

③見守る（Looking after）

「見守る」関係の典型例は、事例３「後ろから見守る」構図である（女018過去）。幼い鳥たちが先に進み、親鳥は後ろから見守っている。子どもが自由に主導的に行動し、子が先に行く姿を、親は直接に身体接触をしないで、少し離れた位置で後ろから眺めている。この構図では、英語でも looking after, back up と言うように、あくまで子を前面に出し、親はひかえめに後方から離れた位置で見守るところが、「包む」「支える」守り方と異なる。

他には、木に登って遊ぶ子を木の下から夫婦で見守っている絵（男008過去）、海で自由に泳ぐ子どもたちを、親が浜辺から見守っている絵（女002過去）、公園でおもちゃの車に乗って走り回る長男を敷物の上から見ている両親（事例12-1）などがあった。また、年老いた「私」が遠く離れた子を案じ、その想いが星となって遠く離れた所に住む子どもたちを見守っている絵（女013未来）もあった。子どもが幼いときだけではなく、成人して独立しても、子どもの身を案じる親の想いが窺えた。

「見守る」関係のバリエーションでは、子どもが主体となり「行く私と見送る親」、家から出て行く子どもを見送る構図も典型的といえよう。仕事に出て行く成人した二人の娘を家で見送る母（女010現在）、仕事に行く背広姿の成人した息子の後ろでアイロンがけなど家事をしながら見送る母（女012現在）、夜行バスに乗って行く息子を心配しながら手を振って見送る父（男015現在）の絵などがあった。

④並ぶ（Siding）

「並ぶ」関係の典型例は、事例４「並んで手をつなぐ」構図である（女010過去）。この構図では、親と子どもが同じ地平線上に立ち、並んで同じ方向を向いていたり、手をつないで一緒に歩いていたり、同じ作業をする様子が描かれる。ときどき、空に太陽が照っており、「仲良し」「一緒」などの説明も多かった。

この構図は、過去・現在・未来のどの時間軸においても男女ともにもっとも多く見られた、一番ポピュラーな構図であった（過去；37.1％、現在；20.0％、未来；27.1％）。若者の絵においても同様にもっとも多く見られた構図であった（過去；16.8％、現在；30.8％、未来；32.8％）。また、文化が違っても同様に、他の関係と比較すると突出して多かった（イギリス , 過去；23.3％、現在；46.6％、未来；38.3％）。

子が幼い時には、夫婦の間の子と手をつなぐ（女020過去）など、幼い子どもの手を引く描写が多かった。また、同じ机に並んで座り、母は洋裁、子はお絵かきをするなど同じ姿勢で共に作業する姿が描かれた（事例9-1）。現在や未来では、一つ屋根の下で子どもと親が並んで笑っている絵（女011未来）や、同じ大きさの夫婦と子どもが並んで立つ姿が描かれ、「今は対等です」と説明された絵もあった（男032現在）。未来図のなかには、墓場で自分の墓を中心に３人の子ども夫婦６人と孫７人が並ぶ絵もあった（女031未来）。

このように、横に「並ぶ」関係では、「仲良し」「同じ」「一緒」「対等」である関係が描かれると考えられる。ただし、数は多くても良く似たパターンで描かれることが多く、絵のバリエーションは少なかった。

⑤向きあう（Facing ）

「向きあう」関係の典型例は、事例５「食卓で向き合って話す」構図である（男017現在）。父と息子がテーブルをはさんで座り、向き合って話し合いながら酒を飲んでいる。このように、親と子が向きあう姿勢をとるときは、並ぶ関係よりも対話が強調されることが多かった。

なお事例５の説明を見ると、親子ともに多忙で別々に行動することも多いのだが、休日に飲みながら話をするのが楽しみと書かれている。この絵に限らず、イメージ画は日常の現実的な姿や頻度の多い姿が描かれるというよりも、「関係性」を表象的なイメージにして描かれるのである。したがって、現実には同じような日常生活を送っていても、「離れる」構図を描くか「向きあう」構図を描くかは、どちらがより関係性を代表していると想っているかによって、描き分けられると考えられる。

「向きあう」関係で対話するバリエーションとしては、次のような絵が見られた。子が幼いときには、食卓で向き合い子が一日の出来事を語り親が助言する（男023過去）、カレンダーを媒介に向き合い母の日や子どもの日を話題に話す（男004過去）など。現在では、夫婦と子たちが互いに距離をおいて「オーイ」「ハーイ」と声をかけあう（女　007現在）、他府県に住むので電話で連絡をとりあう（男004現在）、老年夫婦の2匹の金魚と向き合う多くの孫を連れた金魚の群れ（男001現在）など。未来の絵では、食卓で夫婦や子や孫が対面し笑いながら食事をとる姿（事例12-3, 事例13-3，共に男未来）などである。

「向きあう」関係の、もうひとつの典型は、親子が向き合って「ボール投げ」する絵であった（男036過去，男017過去）。子とボール投げをして楽しく遊ぶ関係は、親子の理想の姿でもあるらしく、「商売は本業と副業があり、大変忙しくて、ボール投げすらできなかった」という説明をつけて描いた例もあった（女029過去）。

⑥離れる（Separating）

「離れる」関係の典型例は、事例６「互いに離れて背を向け別の活動をする」構図である。「並ぶ」関係や「向きあう」関係とは異なり、親子のあいだに空白があり、お互いのあいだに距離があり、それと共に、姿勢も背中向きであり、互いの活動の相違も強調されている。しかし、離れていても、必ずしも仲が悪いわけではない。

「離れる」関係のバリエーションとしては、教師で忙しくパソコンとにらめっこしている娘と自由に旅行を楽しんでいる母の姿が波線で分けられている絵（事例9-2, 女022現在）、自分たち夫婦、娘夫婦と子ども、長男がそれぞれ別に３つに分かれた家のなかにいる絵（女026現在）があった。腰が曲がって杖をついた自分と、タバコをふかす長男が対角線上に離れて互いに背を向けている絵に「同居だが別居形式を取り一軒家に住む。お互いに用事のあるときのみ会話あり。自分は自分の老後を求めて外出する。そこには御縁をいただいた友達が多くいる。趣味を多く持ち、そこに気の合った友との交流が一番心をなぐさめてくれる。息子達は近くでよい」という説明の絵もあった（女029現在）。また、子の姿が描かれず、自分一人だけ孤独に長イスに座り、「厖大な国の借金、急激な少子高齢化、デフレ懸念、家計の弱さを考えると、未来、子供の世話になることは考えられない」と書かれた未来図もあった（男023未来）。

⑦導く（Leading）

「導く」関係の典型例は、事例７「前で主導する親について行く子ども」の絵である（女024過去）。親が前に立って主導したり、手本を示し、子どもが親を追いかけたり、後ろからついて行ったり、まねしたり、従う姿で描かれる絵である。子どもが主導し、それを親が「支える」「見守る」関係とは逆に、親が主導して子を指図したり、ガイドする関係である。この関係は、２例しかみられず少なかった。

⑧与える（Giving）

「与える」関係の典型例は、事例８「お金をあげる」絵である（男027現在）。この絵では、息子ではなく、祖父が孫におもちゃを買うお金を与えている絵である。ほかには、「誕生日や母の日にケーキを買ってくれる」絵があった（女024未来）。与える関係は、この２枚だけで数は少なかった。若者の描いた「私と母」の関係図では、お金や賞やご褒美をくれる絵のほかに、「太陽や雨のように栄養を上からそそいで生育させてくれる」絵がかなり見られた。しかし、子どもの立場とちがい、親自身が自分を太陽や雨にたとえる絵はなかった。

⑨打つ（Punishing）

「打つ」関係は、上位に位置する権威と威厳のある親が、子を打ったり、罰を与えたり、厳しく指導したり、叱咤激励する関係である。若者の絵には、少数派ではあるが子どもを打ったり、叱責する怖い顔の親の絵が見られたが、老年期の親の絵には、この関係は見られなかった。

子どもが親との関係を描いた場合には、大きく威圧的で威厳のある親が描かれる場合があった。それは、時として太陽や雷など、人間ばなれした圧倒的に巨大な存在として上方に位置して、子どもに賞を与えたり、罰として打つ関係として描かれた。しかし、親自身が描いた絵では、時代的には現代より遡るので、現実には今よりも威厳のある親が多かったのではないかと推測されるにもかかわらず、自分と子どもとの関係を、賞罰を与える権力的な存在としては描かれなかった。その理由はいろいろ考えられる。当事者は、自分を「打つ」存在とは自覚しにくいこと、子どもと平和的関係の人のほうが自発的な研究協力者になりやすいことなどである。このモデルを将来的に臨床事例にまで応用することを考えると、この関係性は重要と考えられるので、モデルとして削除しないで残した。

Ⅲ－４　時間系列にそった物語化の特徴ー「過去」→「現在」→「未来」

本調査では、老年期の人々が過去、現在、未来の「私と子ども」の関係を３枚のイメージ画に描いた。そこで、各人の絵を、過去→現在→未来という時間系列で見ると、どのような物語化の特徴があるか、次の観点から分析した。ストーリー構成とテーマの両面から、特徴的に見られるものを、「モデル物語」として抽出した。その結果、４つの特徴的なモデル物語が抽出できたので、その物語に名前をつけた。

第１に、基本形が時系列でどのように変化するかを調べた。基本形の変化に特徴的な形式や構造があるものを比較検討し、共通する特徴を抽出した。特に目立った形式的な特徴は、過去と未来が同じ基本形になるものであった。これを「循環物語」と名づけた。

第２に、基本形が時系列で変化するもののなかで、特徴的な形式や構造の変化があるものを抽出した。特に興味深いものは、過去と比べて、現在や未来で役割や立場が逆転するものであった。たとえば、過去には親が子を「支える」が、未来には逆に親が子に「支えられる」構図になる。これを「逆転物語」と名づけた。

第３に、基本形が時系列で変化するもののなかで、特徴的なテーマがあるものを調べた。「依存（保護）から独立へ」というテーマで理解できるものを、「独立物語」と名づけた。

第４に、細部の違いは別として基本形そのものは３つの時間軸で変化しないものがあった。それを「変わらない物語」と名づけた。

この４つの物語は、相互背反的なカテゴリーではなく、同じ人の絵に重複して２つ以上の物語が見られる場合もある。たとえば、上記の第２の例で、過去に「支える」絵、未来に「支えられる」絵を描いた場合、役割が逆転するから「逆転物語」である。しかし、「支える」という基本形は、過去と未来で同形であるから、「循環物語」としても特徴づけられる。

４つのモデル物語は、若者を対象とした先行研究（やまだ，Yamada）でも見出されており、老年期だけを特徴づけるものではなく、より幅広く一般的に適用可能でモデルとして機能する物語と考えられる。以下、各物語の代表事例を見ながら考察していきたい。

①循環物語（Cycle Story）－未来形が過去形と同じ

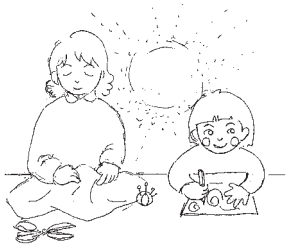
循環物語は、未来形が過去形と同じ基本形で描かれるものである。典型事例は、事例９「並ぶ」から「離れる」そして「並ぶ」へ（女022）である。この絵では、未来形が過去形と同じ形に戻り、回帰するように描かれている。

事例9-1（過去「並ぶ」）では、母である私と幼い娘が隣に並んで同じ机に向かい、母は洋服の仕立てを、娘は広告の裏にお絵かきする姿が描かれている。事例9-2（現在「離れる」）では、娘は中学の教師で毎日忙しく、母の私は、娘とは反対にのんびり、寺社仏閣に出かける姿が描かれている。二人のあいだは、ジグザグの線で区切られ、別々に離れた暮らしをしていることが示されている。絵に描かれていない同居の息子もいる様子だが、「食事も別々に自分自身で作り、お互いに干渉しあわない」と説明されている。事例9-3（未来「並ぶ」）では、娘と二人で並んで海外旅行に行く姿で、再び「並ぶ」関係へと回帰している。「平均寿命までは、お互いに自立して生きたい」と説明されている。老後の絵であるのに、母娘はどちらが親かわからないほど似ており、親のほうが旅行カバンを持つ若々しい姿である。

「並ぶ」関係は、親子が対等で、一緒に同じ行為を共にすることを強調する関係性である。事例９では、現在では別々に自立し「離れる」が、未来では再び自立しながらも「並ぶ」関係にもどる。このように、未来形が過去形と同じ基本形に戻り、回帰、繰り返し、循環、円環などが見られる絵を循環物語とした。

未来形が過去形にもどる循環物語は、老年期だけではなく、若者や中年世代によっても描かれることが確かめられてきた（Yamada, 西山など）。これは、一般化可能な人生物語の語り方のひとつとして、興味深いナラティヴ形式である。

事例９　循環物語（典型）：未来形が過去形と同じ
「並ぶ」から「離れる」そして「並ぶ」へ（女，022，75歳，2人）

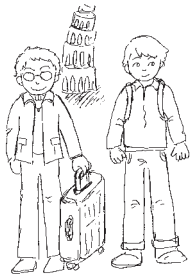


事例9-1　過去「並ぶ」

長女の就学前、家庭的で洋裁をしていました。ご近所の方の洋服の仕立てをしていて、何時も幼い娘は隣に座って、広告紙の裏に絵を書いていました。一番安上がりのお遊びで、割合ホンワカとした空気が流れていました。

事例9-2　現在「離れる」

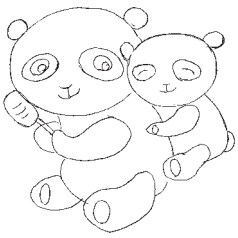
娘は中学校の教員をしていて、忙しい忙しいと言って、パソコンとニラメッコしているそうです。毎日イライラだそうです。母親の私は長いサラリーマン生活（自分自身）を終え、主人も見送り、娘とは反対にのんびりして居り、あちこちのカルチャー通いをしています。同居の長男とは食事も各々別々に自分自身で作り、お互いにあまり干渉し合わない様にしています。



事例9-3　未来「並ぶ」

幸いにして年の割には元気ですので、子供に時間的に余裕が出来れば、一緒に海外旅行に出掛け度いであう。亡夫とは度々出掛けていました。せめて平均寿命迄は、お互いに自立して生き度いと願っています。

事例10　逆転物語（典型）：過去の役割が未来に逆転
「支える」から「見守る」そして「支えられる」へ（女，027，77歳，１人）

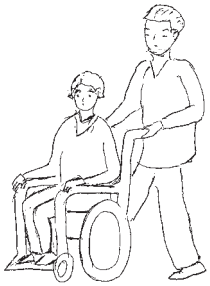


事例10-1　過去「支える」

２回の流産を経験、やっと生まれた子供だったので、絵の様に肌をふれ合って可愛いがりました（３才迄）。

事例10-2　現在「見守る」

健康でスポーツ一家ですが、現在学費が大変！年金の木が枯れないかと少し心配する位、援助中です。でも幸せな関係だと想っています。（老夫婦、年金の木と貯金の木。長男、嫁、孫女１人、孫男２人）



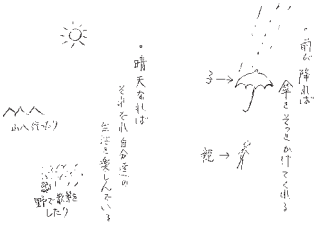
事例10-3　未来「支える（逆転）」

年金問題、介護の問題等、一番考えていかねばならない事で、自分自身が高齢者となって、切実に受け身になっているのを痛感しています。私は看護師、保健師、戦後大変な時期に資格をとり、約53年間、仕事と子育てをがむしゃらに続けて、息子にも淋しい思いをさせた時期もありましたが、今は後悔する事もなく過ごしています。親の背中を見て子供は育つという言葉を再認識しています。老後、子供に負担をかけたくないと云う思いは、高齢者の一番の願いでしょうね！（この絵の様には、余りなりたくありませんが、息子は覚悟している感じです。）

事例11　逆転物語（変異１）：役割が逆転して戻る
「与える」から「与えられる」そして「支える」へ（女，028，76歳，3人）

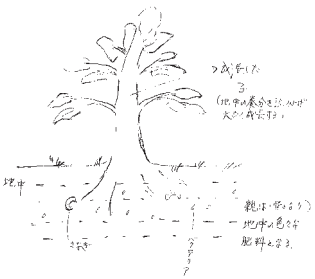
事例11-1　過去「与える」

大木は母親である私と夫の姿。小さな木は子供たち。大きな木は小さな木に太陽が当たるように、風には直接当たらないように、枝（手）を伸ばして保護してやって成長を助けている。



事例11-2　現在
「離れる／与える（逆転）」

普段はお互いに干渉せずに生活している。時々、どうしているかと気にかけて尋ねてくれる。と言うことは、親と子の立場が逆転して子供たちが親の事をたえず心にかけてくれているという事か。（左の絵：晴天なれば、それぞれ自分達の生活を楽しんでいる。山へ行ったり、野で散策をしたり。右の絵：雨が降れば傘をそっとかけてくれる。子が傘）



事例11-3　未来「支える」

木：成長した子（地中の養分を汲み上げ大きく成長する。）地中：親は（骨となり）地中の色々な肥料となる。地中には、バクテリアやさなぎ。

事例12　逆転物語（変異２）：役割が逆転して戻る
「見守る」から「導かれる」そして「向きあう」へ（男，020，65歳，2人）

事例12-1　過去「見守る」

お天気の良い日は、近くの公園に家族でピクニック。車好きの長男はいつもおもちゃの車がお気に入りで元気に走りまわっていた。

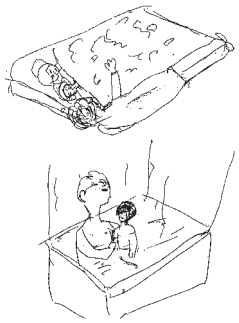
事例12-2　現在「導く（逆転）」

車好きだった息子達は２人とも自動車会社へ勤務。親よりずい分背も高く、いつも話題は車の話と愛車の自慢。

事例12-3　未来「向きあう」

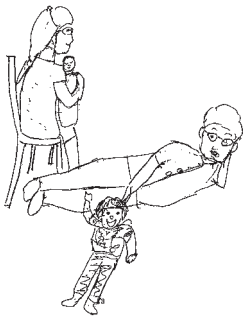
子供、孫達が揃って楽しめる家庭の構築。

事例13　独立物語（典型）：依存（保護）から独立へ
「包む」から「見守る」そして「向きあう」へ（男，002，68歳，2人）



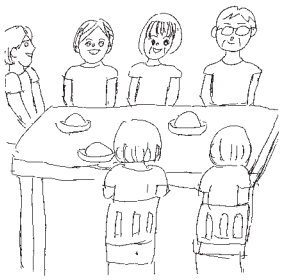
事例13-1　過去「包む」

夫婦二人での生活でしたので、子供が続けて出来ましたので、ほとんど毎日、二人をおふろに入れました。子供を寝かしつけました。



事例13-2　現在「見守る」

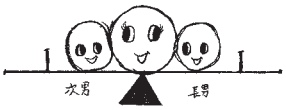
長女はつわりがひどかったので、早くから実家にもどってきました。その間、妻と孫の世話にかかっています。次女は結婚について問題をかかえています。



事例13-3　未来「向きあう」

娘たち、孫たちと楽しく食事ができればいいです。

事例14　変わらない物語（典型）：基本形が同じ
「並ぶ」から「並ぶ」そして「並ぶ」へ（女，019，59歳，2人）

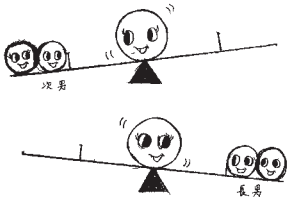


事例14-1　過去「並ぶ」

いつも一緒でした。（左、次男、右　長男）

事例14-2　現在「並ぶ」

子供達の家庭が出来、少し離れました。（左、次男夫婦、右、長男夫婦と孫）



事例14-3　未来「並ぶ」

どちらにお世話になるのかな。（上左　次男夫婦、右下、長男夫婦）

②逆転物語（Reversal Story）－役割や立場が逆転

逆転物語は、基本形が時系列で変化するもののなかで、過去と比べて、現在や未来で役割や立場が逆転するものをさす。典型は、事例10「支える」から「見守る」そして「支えられる」へ（女027）である。ケアするものからケアされるものへと立場の逆転が見られる。

事例10-1（過去「支える」）は、かわいい笑顔のまるまるしたパンダの親子の絵で、親が子どもを背中に背負ってあやしている様子が描かれている。

事例10-2（現在「見守る」）は、親は後ろで子どもたちの活動を見守る木になっている。子どもたちは、長男夫婦がテニス、孫娘もテニス、２人の男孫がバスケット、それぞれスポーツする活動的な姿で前面に描かれている。後ろの木は「老夫婦、年金の木と貯金の木」で、子どもたちを見守っている。この木の援助のしかたは、直接に身体接触や手助けで支える関係ではなく、後ろから少し距離を置いて見守っている関係である。

事例10-3（未来「支える（逆転）」は、車いすに乗った親を後ろから押す子どもの姿が描かれている。未来には、子が親にケアされていた過去と立場が逆転して、ケアされる主体が親になり、親を介護する姿が描かれている。

事例10は、過去に親が子を「支える」関係から、未来には子が親を「支える」関係へと立場が逆転する「逆転物語」である。しかし、過去も未来も同じ形であるから、同時に「循環物語」でもある。

このように「支える」から「支えられる」関係へ、ケアしたものがケアされるものへ変化する逆転物語は、ケアをテーマにした世代継承の物語が語られているといえよう。エリクソンの概念を使えば、自己を確立する「アイデンティティ物語」が子どもから成人になるときの重要な物語であるとすれば、生成継承性（generativity）にかかわる「世代継承物語」は成人期の重要な物語になる（McAdans & St.Aubin, 1998）。そのなかでも、次世代をケアし、次世代にケアされるというテーマについて語られる「ケア物語」は成人期の中心的な物語といえるだろう（西山，2009）。

老年期では逆転物語が多様なかたちで見られた。そこで変異形を２種類事例として示した。事例11（女028）は、過去から未来にわたって、２回役割逆転が見られた興味深い絵である。過去では、事例11-1（過去「与える」）のように、大木の「私」が枝（腕）を伸ばして子の成長を助け援助を与える姿が描かれている。現在では、事例11-2（現在「離れる／与えられる（逆転）」）のように、晴れの日は別々の生活で離れているが、雨の日には子どもが逆に傘になり「私」を助けてくれる。ここには、親と子の順当な世代交代、役割逆転が見られる。しかし、最も注目すべきは、11-3（未来「支える」）に再び親が子を「支える」役目にもどることである。未来に再度逆転して、親が子を支える構図になる。死んで骨となった「私」が、大きな木に成長した子どもを地面の下から支える様子が描かれている。

事例11の変化プロセスからは、「支える」「支えられる」、「ケアする」「ケアされる」という逆転関係が、それほど単純ではなく一筋縄ではいかないことがわかる。親は老化によって子どもからサポートを受けることはあるが、親としての自覚や子どもを守るという

気持を失うわけではない。子どもに助けられながらも、もう一方では子どもを守る気持ちもいつまでも持続するのではないだろうか。子を「守る」気持ちは、子どもからサポートを受けている間も、そして自らが死んだあとも残り続けると考えられる。

事例11-3の自分が死んだあとに土の養分となって次世代を支えるという構図には、Yamada（2004）が提唱してきた「生成的ライフサイクルモデル（りんごのライフサイクル図）」と共通するモチーフが見られる。自分の子を「守る」気持ちが、死後にもつづき、次世代としての自分の子に限定されず、将来世代全体のためにつくそうとする、より大きな生成継承性が見出される。人生物語やケア物語を個人の生涯に閉じず、将来世代との関係性の物語へとむすんでいく世代関係の広がりがある。

また、死後の人々が、生きている人々を助けたり、未来の世代を見守る物語は、「この世とあの世の人の関係イメージ」でも頻繁に現れた（やまだ，2010b）。死後のいのちの循環や死後の人々が支え見守る物語には、ライフサイクルを個人の生涯に閉じず、死後もつづいていくとイメージする時間軸の広がりがある。これらは、日本文化のなかに現代でも生きている注目すべき物語と考えられる。

逆転物語のもうひとつの変異形は、事例12（男020）である。事例12-1（過去「見守る」）では、父親（私）が、公園のシートの上で母親に抱かれた次男と、おもちゃの車で走り回る長男を、少し離れた位置で見守っている。事例12-2（現在「導く（逆転）」）では、車へ手を引いて導いているのは、父よりも身長が高く、自動車会社に勤めていて父よりも車に詳しい息子のほうである。「親が子を導く」関係を基本とすると、この「子が親を導く」関係性は逆転物語と考えられる。事例12-3（未来「向き合う」）では、父と息子は対等に食卓を囲み向き合って乾杯している。

事例12では、逆転物語が描かれているだけではなく、親子をむすぶ「車」というモチーフは一貫して描かれている。過去には公園で長男が乗っていた「おもちゃの車」が、現在では「実物の車に乗る」姿になり、未来には遠くに駐車された「誰も乗っていない車」が家族の団らんを見守っているかのように置かれている。「車」というシンボルに注目すると、「変わらない物語」のイメージも含まれているといえよう。また、過去には公園で親が飲食する後ろで長男が遊んでいたが、未来には親子が公園で飲食するうしろで孫たちが遊んでいる。過去と未来が一巡して、世代交代しながら似た光景が繰り返されている。「公園」というシンボルに注目すると、世代サイクルを含む循環物語のイメージも含まれているといえよう。

今回の分析では、基本形がどのように変化したかに注目してきた。さらに、このようにイメージの詳細な部分まで見ていくと、さまざまな物語の意味のディテールが多様に組み合わさって、独自な絵の味わいになっていることがわかる。したがって、物語形式だけではなく、個々の事例をもとに、絵をまるごと見ていくことが重要である。質的研究法を重視するのは、そのためである。イメージ画でないとわからない複合的な意味の混ざった質的事例を丁寧に見るところから、興味深い発見が可能になると考えられる。ただし、ビジュアル・ナラティヴ研究では、絵を精神分析的に解釈したり、絵に主観的な意味を推測し過剰に読みこむような、「解釈」的な見方は極力排することに注意されたい。語り方の

「形式」「順序」「シンボル」など、誰が見ても共通して明らかに見えるものを重視するのである。

③独立物語（Independent Story）－依存（保護）から独立へ

独立物語は、親の保護を受け依存していた子どもが、親から自立し独立するテーマの物語をさす。典型例は、事例13「包む」から「見守る」そして「向きあう」へ（男002）である。

事例13-1（過去「包む」）は、ふとんに寝かせた子どもを手でおおい、あたたかい風呂に親子が一緒に入る絵である。ふとんや風呂は、「つつむ」関係の象徴的な事物である（やまだ1988）。13-2（現在「見守る」）では、元気よく動く孫を、後ろで寝転びながら「見守る」。13-3（未来「向きあう」）は、子どもや孫も一緒に笑顔で楽しく食卓を囲む「向きあう」関係である。親が子をあたたかく包んで保護する関係から、後ろから見守る関係へ、そして対等に向きあう関係へと、関係性が自立に向かって変化しているといえよう。

「依存（保護）から独立へ」という物語は、発達心理学でもなじみの物語であり、親子関係を語るときのマスター・ナラティヴでもある。この物語は、先行研究の若者では、もっとも多く描かれたポピュラーな物語であったが、今回の老年世代では、この物語を描いた人々は少なかった。

④変わらない物語（Consistent Story）－基本形が同じ

「変わらない物語」は、過去、現在、未来において同じ基本形で描かれる物語である。典型例は、事例14「並ぶ」「並ぶ」「並ぶ」（女019）である。事例14-1（過去「並ぶ」）では、母親（私）を真ん中にして両側に長男と次男の顔が一直線のシーソー上に並んでいる。事例13-2（現在「並ぶ」）では、基本形は同じで一直線に並んでいるが、長男と次男にはそれぞれ家族ができて、中央の母親とは距離がひらいている。事例13-3（未来「並ぶ」）では、シーソーの線が二本に増え、上に次男夫婦と並ぶ母親の絵、下に長男夫婦と並ぶ母親の絵が描かれている。すべて「並ぶ」関係で描かれているので、基本形式もテーマも同じ「変わらない物語」だといえる。ただし、この例のように、「変わらない物語」においても、詳細を見れば、微妙な線の位置や距離で時系列にそった変化は表現されている。

Ⅲ－５　イメージ画の特徴と年齢や性との関連

最後にイメージ画の特徴とフェイスシートによって得られた結果との関連をみていきたい。今回は、協力者の人数が少ないので、数値は参考程度であるが、フェイスシートの各質問項目の回答によって構図を見たとき、特に偏りのみられた項目のみをここで取り上げる。

年齢、子どもの数、同居の有無、健康状態などによる偏りや顕著な差異は、特には見られなかった。特筆すべきは、調査協力者の性別による違いであった。各時間軸においてみ

られた構図の中で、性別によってその抽出数に偏りがみられたのは、過去の『親が子を守る「包む」「支える」「見守る」』グループの構図（男性；14、女性；７）および、未来の『子が親を守る（逆転）』グループの構図（男性；５、女性；13）であった。過去では、親が子を守る構図は、女性よりも男性に２倍多くみられた。特に「包む関係」の構図は男性が６人、女性は０人であった。未来では逆に、『子が親を守る（逆転）』グループの構図が、男性よりも女性に２倍以上多くみられた。

「包む」構図は、母性的と考えていたが、女性よりも男性のほうに、あたたかく子を包む絵が多く見られたことは意外であった。また、男性は過去に自分が子を「守る」絵を多く描き、女性は未来に自分が子から「守られる」絵を多く描いた。これには、いろいろな理由が考えられる。第１に、男性の方が扶養義務を負うことが多いので、子どもや家族を守る、サポートするという意識が強いのかもしれない。第２に、女性の方が、子どもから将来、世話を受けることを期待していると考えられる。これは平均的に女性の方が寿命が長く、将来配偶者を亡くした後のことを想定するからであろう。また第３に、男性は自分が家族を守る、サポートするという扶養意識が強いために、将来的に子どもからサポートを受ける「役割逆転」を想像しにくいと考えられる。

Ⅳ　総合考察

本研究では、老年期の男女70人に、「私と子ども」関係について「過去（子どもが幼いとき）「現在」「未来」３枚のイメージ画を描いてもらった。老年世代においても、若者世代を対象にした先行研究と同様に、興味深いイメージ画を描けることがわかった。調査をはじめる前は、マンガなどの表現になれている若者に比べて、絵を描きなれない老年世代にイメージ画調査が可能かどうかさえ疑問であった。確かに老年世代では、若者に比べると未来図が描かれないで「現在と同じ」とコメントされる場合が若干多かった。しかし、本研究の事例を見ればわかるように、老年世代においても、興味深い絵が描けることがわかった。イメージ画によるビジュアル・ナラティヴは、多文化にも多世代にも、幅広く使用できる方法だといえよう。

老人の絵では、自分と子どもの二者関係を描くだけではなく、夫婦（自分と伴侶）、祖父母、複数の子ども、子どもの伴侶、孫など多人数の関係性が多く描かれたことも、きわだつ特徴であった。若者の絵では、「私」である自己が中心で、祖父母やきょうだいが描かれることは稀であった。老年世代では、昔の子育てに実際に多世代がかかわったという現実の違いもある。しかし、現在や未来像においても、「あなたと子ども」という問いの範囲を超えて、自分の伴侶や子の伴侶や複数の孫など、別居して近くにいない者を含めて多世代の人間関係がイメージされた。これは、老年世代のほうが、自分をとりまく人間関係を描く範囲が広く大きく、多人数を含むことを示しており、大変興味深いと考えられる。

本研究では、描かれたイメージ画をビジュアル・ナラティヴとしてとらえ、おもに次の２点から検討した。

第１に、「私と子ども」関係の描画から、親子関係の基本のかたちを抽出し、先行研究のネットワークモデルを改良した。老人期においても、このモデルは、多文化で描かれた成人前期の若者と同様に使えることがわかった。このモデルは、幅広い年齢層で、また多文化で適用可能な汎用モデルにできることが示された。

本研究では、親子関係のネットワークの結び目に位置する典型的な親子関係のパターンのうち、先行研究と共通するものを９種類の「基本形」として、名前を吟味し定義を加え、典型例を提示した。基本形は、①包む（Wrapping)、②支える（Supporting)、③見守る（Looking after)、④並ぶ（Siding)、⑤向きあう（Facing)、⑥離れる（Separating)、⑦導く（Leading)、⑧与える（Giving)、⑨打つ（Punishing）と名づけられた。

もともと本ネットワークモデルは、親子関係だけに閉じるものではなく、「人と人の基本のかたち」を絵にすることをめざしてきたが、年齢や世代の相違、文化の相違、また関係する人数にかかわらず、一般的に使えるモデルになったといえよう。親子関係を超えて、「教師と生徒」「上司と部下」「友人関係」など、より一般的な「人と人の関係性」をあらわすモデルとしても用いることができると考えられる。また、本研究のように二世代を対象にした二者関係だけではなく、成人前期や中年期を対象にした三世代の関係性をあらわすためにも応用できると考えられる（西山，2009；2011, Nishiyama & Yamada, 2009)。

第２に、老年期の人々が描いた３枚の絵を時系列に見て、「過去 - 現在 - 未来」の人生物語の特徴を調べた。ストーリー構成とテーマの両面から、特徴的なものを、「モデル物語」とした。その結果、次の４つの特徴的なモデル物語が抽出できた。「①循環物語（Cycle Story）－未来形が過去形と同じ」、「②逆転物語（ Reversal Story）－役割や立場が逆転」、「③独立物語（Independent Story）－依存（保護）から独立へ」、「④変わらない物語（Consistent Story）－基本形が同じ」である。これらは若者にも共通する一般化可能な物語と考えられる。

老人期の特徴的な物語として、多くのバリエーションが見られたのは、「ケアしたものがケアされるものになる」逆転物語であった。過去では自分が次世代（子ども）をケアする関係であったものが、未来では自分自身が子どもからケアされる関係へと逆転する物語である。逆転物語は、若者世代にもみられたが、老年世代では圧倒的に多く見られたポピュラーな形式であった。若者の絵では、未来は「自立する」「結婚して子どもをもつ」ところまでが描かれることが多く、老人になった未来までの時間展望が描かれることは少なかった。しかし、老年世代では、介護が必要な未来が実感として迫っているので、「ケアされる」絵が増加し、逆転の構図が多々見られたと考えられる。未来図には、子どもから「支えられる」関係になりたいという願望も含まれているであろう。なお、「支えられる」シンボルとしては、車イスを押してもらうという絵が非常に多かった。

物語論的に興味ふかいのは「循環物語」である。循環物語がつくられるのは、以下のような理由によるのではないかと考えられる。

第１に、「現在」よりも「過去」や「未来」は、時間的に遠いという点では共通している。そのため、現実の姿が反映されやすい「現在」よりも、より理想化した象徴的な関係

性が描かれやすいと考えられる。

第２に、物語の一般形式として「はじめにもどって終わる」という物語形式がある。たとえば、「ふるさとから出発した人が、怪物退治や宝探しや結婚をして、再びふるさとに戻る」「幸せな境遇に生まれた人が、母親の死や人さらいや魔法など何かの理由で不幸になり、再び幸福な境遇に戻る」などの物語である。自分の人生を語るときにも、この物語形式を使っている可能性がある。

第３に、人生物語の語り方には、時間概念が大きな影響をもっている。ひとつは、時間を不可逆的なものとみなし、直線的、前進的、進歩的、一方向的にすすんでいくと考える時間概念がある。近代西欧的な時間概念である。それに対して、循環・反復・回帰・円環を特徴とするサイクルする時間概念でとらえる見方もある（やまだ，2010a; Yamada & Kato, 2006）。循環物語は、ライフサイクルという用語の根底になる時間概念とむすびついており、文化の物語として根強く生きていると考えられる。エイジングと時間概念との関係は、今後の興味深い課題となるだろう（McFadden & Atchley, 2001）。

本研究で焦点をあてた「老年期の人生物語」の研究は、生涯発達心理学の立場からみると、重要な意味をもつ（小嶋・やまだ，2002；南・やまだ，1995）。親子関係は現役の子育て中だけではなく、生涯を通して重要な意味をもち、人生物語の基調を形づくると考えられるからである。

従来、老人は、高齢化社会におけるケアや援助や福祉や介護の対象とされてきた（下仲・中里 ,2004 など）。また、老いは、下降、喪失、病い、死などとむすびつけられてきた。語り研究においても、高齢者の人生回顧（ライフレビュー）を心理療法に役立てる研究（黒川，2005；Ingersoll-Dayton & Cambell, 2001/2004）や、人生物語（ライフストーリー）を死生観と関連づける研究などがなされてきた（川島，2011）。

しかし、老年期の人々も、「親」として子どもたちとの関係性のなかで生きている。本研究では、老人が当事者として自分と子どもの関係や自分の人生物語を描いているが、そのような問い方をする研究や、それを若者の人生物語と比較しながら「共通モデル」によってとらえる研究は従来ほとんどなかった。老人は一方的に保護されたり、ケアされる存在ではないだろう。彼らは老いても親であり、未来の物語を紡ぎ出すことができる。彼らの多様な人生イメージをとらえる本研究は、新しい老人観を提示するにも役立つだろう。

親子関係を「人と人の関係性」の基本と考え、それをビジュアル・ナラティヴとしてモデルと事例によって一般化していく本研究の方法は、質的研究の方法論のひな形としても応用可能性が高いと考えられる。

文献

Bruner, J.（1999）．*意味の復権－フォークサイコロジーに向けて*（岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子訳）．京都：ミネルヴァ書房．（Bruner, J.（1990）．*Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.）

Ingersoll-Dayton, B. & Campbell, M.S.W.（2004）．*高齢者のカウンセリングとケアマネジ*

メント（黒川由紀子監修　望月弘子訳）東京：誠心書房（Ingersoll-Dayton, B. & Campbell, M.S.W.（2001）. *The delicate balance: Case studies in counseling and care management for older adults*. Health profession press.）

小嶋秀夫・やまだようこ（編）.（2002）. *生涯発達心理学*. 放送大学教育振興会.

黒川由紀子.（2005）. *回想法：高齢者の心理療法*. 東京：誠信書房

岡堂哲雄編.（1989）. *家族関係の発達と危機*. 東京：同朋舎出版

下仲順子・中里克治編.（2004）. *高齢者心理学*. 東京：建帛社

濱口惠俊編.（1993）. *日本型モデルとは何か*. 東京：新曜社

川島大輔.（2011）. *生涯発達における死の意味づけと宗教*. 京都：ナカニシヤ出版

McAdams, D.P.（1993）. *The stories we live by: Personal myths and the making of the self*. New York: Morrow.

McAdams, D.P.（2006）. *The redemptive self: Stories Americans live by*. Oxford: Oxford University Press.

McAdams, D.P. & de St. Aubin, E.（Eds.）（1998）. *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation*. Washington, D.C. :American Psychological Association.

McFadden, S.H., & Atchley, R.C.（2001.）*Aging and the meaning of time: A multidisciplinary exploration*. New York: Springer.

南博文・やまだようこ（編）.（1995）. *講座生涯発達心理学５－老いることの意味*. 東京：金子書房.

西山直子.（2009）.「母」世代から見た「祖母－母－娘」三代の関係性－イメージ画とインタビューを通して. *京都大学大学院教育学研究科修士論文*.

西山直子.（2011）. 青年期娘世代から見た「祖母－母－娘」三代の関係性－ visual narrative としてのイメージ画を通して. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, *57*, 379-392.

Nishiyama, N. & Yamada, Y.（2009）. Visual narratives of Grandparent-Parent-Child relationships from the perspective of young adult granddaughters. *International Society for the Study of Behavioural Development Bulletin*, *56(2)*, 2-6.

White, M. & Epson, D.（1992）. *物語としての家族*.（小林康永訳）. 東京：金剛出版（White, M. & Epson, D.（1990）. *Narrative means and therapeutic ends*. New York: W.W. Norton.）

山田洋子.（1986）. モデル構成をめざす現場（フィールド）心理学の方法論. *愛知淑徳短期大学研究紀要*, *25*, 29-48.

やまだようこ.（1988）. *私をつつむ母なるもの－イメージ画にみる日本文化の心理*. 東京：有斐閣.

山田洋子.（1989-1990）. イメージ画にみる母子関係 その１～その６. *幼児の教育*, *88*, 5, 50-56；*88*, 7, 30-37；*88*, 9, 48-55；*88*, 11, 48-55；*89*, 1, 48-55；*89*, 3, 47-55. 東京：フレーベル館.

やまだようこ．(1992)．「意味記号としての「私と母」のイメージ」．星野命編．*異文化間関係学の現在*．東京：金子書房

やまだようこ．(1995)．生涯発達をとらえるモデル．無藤隆・やまだようこ（編）*講座生涯発達心理学１－生涯発達心理学とは何か*（pp. 57-92）．東京：金子書房．

やまだようこ．(2000)．人生を物語ることの意味－ライフストーリーの心理学．やまだようこ（編）．*人生を物語る－生成のライフストーリー*（pp. 1-38）．ミネルヴァ書房．

やまだようこ．(2002)．現場（フィールド）心理学における質的データからのモデル構成プロセス－「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に．*質的心理学研究，1*，107-128.

やまだようこ．(2006)．質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念－ナラティヴ・ターンと物語的自己．*心理学評論*，49(3) 436-463.

やまだようこ．(2007)．「いない母のイメージと人生の物語」、*喪失の語り－生成のライフストーリー（やまだようこ著作集第８巻）*．東京：新曜社.

やまだようこ（2008）多声テクスト間の生成的対話とネットワークモデル－「対話的モデル生成法」の理論的基礎．*質的心理学研究，7*，21-42.

やまだようこ．(2010a)．時間の流れは不可逆的か？―ビジュアル・ナラティヴ「人生のイメージ地図」にみる，前進する，循環する，居るイメージ．*質的心理学研究，9*，43-65.

やまだようこ．（編）．(2010b) *この世とあの世のイメージ－描画のフォーク心理学*．東京：新曜社.

Yamada,Y. (1991). Japanese, British and American adolesents' representations of self development and mother-child relationships. The paper presented at the seminar of Developmental Psychology, Oxford University.

Yamada, Y. (2004). *The generative life cycle model: Integration of Japanese folk images and generativity. In de St. Aubin, E., McAdams, D.P., & Kim, T. C. (Eds.), The generative society: Caring for future generations* (pp.97-112). American Psychological Association..

Yamada, Y. (2011) .Image maps of life and the spiritual life cycle: Japanese, British, Austrian and French University Students' visual narratives. *New Horizons of Academic Visual-Media Practices. Proceeding of 13th Kyoto University International Symposium*. 122-125.

Yamada, Y. & Kato, Y. (2006). Images of circular time and spiral repetition: The generative life cycle model. *Culture & Psychology*, 12, 2, 143-160.

（やまだようこ　教育方法学講座　教授）

（村上幸平　学進館　講師）

（受稿 2011 年 9 月 2 日、改稿 2011 年 11 月 25 日、受理 2011 年 12 月 26 日）

京都大学大学院教育学研究科紀要　第58号　2012

Images of the Relationships between Elderly Persons and Their Children: Visual Narratives of Past, Present, and Future

YAMADA Yoko and MURAKAMI Kohei

This study had three purposes. First, it examined how elderly persons represent themselves and their relationships with their children. Second, it compared the patterns characterizing these relationships with those in the drawings of young adults taken from previous studies. Third, it identified the narrative themes that structured visual life stories of the past, present, and future. Three kinds of drawings (of past, present, and future relationships) were collected from 70 participants (males: 36, females: 34; average age: 70.9 years), and the following nine fundamental patterns of relationship were observed: ① wrapping, ② supporting, ③ looking after, ④ siding, ⑤ facing, ⑥ separating, ⑦ leading, ⑧ giving, and ⑨ punishing. These fundamental patterns were common to the young adults' drawings depicting their relationships with their mothers. Four narrative structures and themes were identified: cycle story (the future pattern resembling the past), reversal story (from caring for to being cared for), independent story (moving from dependence to independence), and consistent story (no changing among three fundamental patterns from past to future).